

## 舟と琴

### 【解説】

この『舟と琴』は、親友の尾上墨雪さんから依頼されて作曲したものです。はじめは舞踊曲として作りましたが、のちに演奏用にアレンジしました。

二〇一〇年、紀尾井ホールでの演奏でお聴きください。

この曲は、古事記にある「枯野（からの）」という部分をそのまま歌詞に用いて作曲しています。簡単にあらすじを申しますと、仁徳帝治世の頃、一本の高い木がありました。太古よりの命を繋いできた巨木には、自然の魂が宿っています。ある時その木を切って舟を作ると、とても速く進む舟ができました。それは「枯野」と呼ばれ、淡路島から宮殿のある難波宮に、良い水を毎日運びました。やがて舟が壊れてしまった時、その舟の木を使って藻塩を焼き、良質の塩を大量に得たのですが、木の芯はどうしても焼けませんでした。

芯は、木の魂そのものだったのでしよう。

そこでその芯をお琴に作って鳴らしたところ、お琴の音は、七里四方に響き渡り、人々を幸せにしたそうです。

木でスピードのある舟を作れるのは、科学技術というものです。その舟の廃材を利用して塩を焼いたことも、それだと思えます。

しかし、このお話の芯にあたる部分は、木には魂があり、魂の塊を琴に作ると、たった一面の琴が七里四方の人々を幸せにしたということです。人々の最初の幸せは、琴に象徴された音楽だということなのだと思います。

改めて音楽の大切さを思った次第です。

注…ことという字は、古事記に従って、「箏」ではなく「琴」という字を使っております。